

平成30年度 独創的研究助成費 実績報告書

平成31年3月29日

報告者	学科名	保健福祉学科	職名	助教	氏名	澤田 陽一
研究課題	高齢者の溜め込み傾向と関連する遂行機能の探索					
研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	澤田 陽一	保健福祉学科・助教		実験心理学	研究計画・実施
	分担者					
研究実績の概要	<p>【背景・目的】 溜め込み傾向 (hoarding) とは、役に立たないようなモノであっても過剰に入手し捨てることのできない行動と、その結果として居住空間がモノであふれかえった状態を指し (土屋垣内, 2015)、強迫症状などを呈する精神障害や前頭側頭型認知症などで出現し、近年では一人暮らしの若者でも認められる。溜め込み傾向が重度化すると、個人の衛生的問題が生じるだけではなく、ゴミ屋敷化した結果、周辺住民とのトラブルが生じ、特に高齢者の場合では孤立化などに拍車をかけることから社会問題化するの言うまでもない。超高齢社会に伴い、今後、独居高齢者が増加する我が国において、溜め込みに至る高齢者の早期発見および予防的介入は喫緊の課題であり、行政的介入も未だ不十分な現状を勘案すると、溜め込み傾向の実態を明らかにすることは社会的意義がある。しかし、溜め込み傾向に関して、どのような要因が関わっているかは十分に明らかにされておらず、また、本来ないはずの症状が現われるという意味で、当該傾向は「陽性症状」に当たるため、個人差が大きい可能性がある。Jackson の階層理論によれば、陽性症状は上位の神経階層の制御が解かれた結果、生じるとする理論仮説があることから、脳の前頭葉が司る上位の機能、すなわち「遂行機能」により、溜め込み傾向の出現の程度が左右される可能性がある。そこで、本研究は、溜め込み傾向の関連要因として、遂行機能に着目し、種々の遂行機能がある中で、どの機能と当該傾向が関連するかを探索的に検討することを目的とする。本研究により、これらの関連が明らかになれば、高齢期において遂行機能検査を駆使して、溜め込み傾向の評価や将来的な重度化の予測が可能となり、予防的介入の糸口が得られると考えられる。</p>					

※ 次ページに続く

<p>研究実績 の概要</p>	<p>【方法】</p> <p>■対象者：地域から募った60～75歳の高齢者71名（平均年齢66.9±4.1、教育年数14.1±2.0、男/女：42/29）とし、神経学的・精神医学的疾患の既往があること、認知症・認知機能障害の有無を確認するために実施するMini Mental State Examination (MMSE)の得点が23点以下であるものは除外した。</p> <p>■溜め込み傾向の評価：Frostら（2004）が開発したSaving Inventory-Revised (SI-R)を邦訳した土屋垣内らの尺度を用いる。当該尺度は「入手」・「捨てられない」・「散らかり」の3因子23項目から成る尺度である（得点が高いほど溜め込み傾向がある）。加えて、抑うつ傾向との関連も想定されたことからKessler10 (K10) 尺度、遂行機能の自己認知的側面（≡主観的評価）を評価するエフォートフル・コントロール尺度も合わせて測定した。</p> <p>■遂行機能の評価：近年、Miyake & Friedman (2012)によって遂行機能は、更新（ワーキングメモリ表象の更新と監視：updating）、抑制（ステレオタイプの反応の抑制：inhibition）、転換（課題や心的セット間の切り替え：shifting）の3つの機能に集約されており、それらを反映する下記の認知機能検査・課題を実施した。</p> <p>1) 更新機能：Reading Span 検査（重み付けスパン得点）/Digit Ordering 検査（正答数） 2) 抑制機能：Go-nogo 課題（反応時間）/Stroop color-word 検査（反応時間） 3) 転換機能：Digit Task Switching 課題（反応時間）/Trail Making 検査（反応時間）</p> <p>■分析方法 年齢、性別、教育歴、K10スコア、エフォートフル・コントロール尺度スコアを統制変数、SI-Rの総得点および下位因子の総得点を目的変数、各遂行機能検査・課題のスコアを説明変数とした、階層的重回帰分析を行った。</p> <p>【結果】</p> <p>■SI-R 総得点の分析： ・溜め込み傾向を表す SI-R 総得点を説明する有意な変数は、更新機能の評価する Reading Span 検査成績（$\beta=0.32^*$）、Digit Ordering 検査スコア（$\beta=-0.41^{**}$）であった（調整済み$R^2=0.15$）。</p> <p>■下位因子別の分析 ・「入手」：手に入れたいものへの衝動性・感情は、「捨てられない」：捨てられないことへの衝動・感情を説明する変数はなかった（モデル不成立）。 ・「捨てられない」因子を説明する有意な変数は SI-R 総得点と同様に、更新機能の評価する Reading Span 検査成績（$\beta=0.32^*$）、Digit Ordering 検査スコア（$\beta=-0.41^{**}$）であった（調整済み$R^2=0.16$）。 * : $p<0.05$、** : $p<0.01$</p> <p>【考察】 溜め込み傾向を説明する遂行機能を探素的に検討した結果、遂行機能の中でも更新機能、つまり、同時並行で複数の情報を処理する機能が過関連していることが示唆された。しかし、関連を示した Digit Ordering 検査は、成績が不良であれば溜め込み傾向は高くなった一方で、Reading Span 検査は、成績が不良であれば溜め込み傾向は低くなっていたことは矛盾している。これはサンプル数の不足やモデルの過調整などの要因が関わっている可能性があるため、今後、より詳細な検討をすることにより、溜め込み傾向の認知基盤を明らかにする予定である。</p>
<p>成果資料目録</p>	<p>なし</p>